

II 遺 跡

1. 遺跡の外観

庁舎建設予定地は、工場跡地と北側の旧水田とからなる。工場跡地には、約70cmの客土があり、その下に旧水田面が残る。水田の耕土は約20cm、床土は約15cmで、その下に若干の灰褐色粘質土の遺物包含層があつて、奈良時代の遺構面となる。

遺構検出面の地層（地山）は、北半部は黄褐色粘質土、南半部は茶褐色粘質土が主体で、整地層は発掘区東寄りの一部に薄く存在するほかはほとんどない。遺構はこれらの土層上面から掘込まれている。遺構検出面の上面の標高は69.40m前後で、旧水田の区画に応じて東北で高く、西南に向うにしたがって段状に低くなっている。

左京三条四坊七坪に構築された遺構は、奈良時代初頭から平安時代初期にわたっており、それらは大きく4時期に区分することができた。七坪は前半の時期（A、B期）は2条の東西溝S D1851及びS D1889によって南北に分割され、その間に坪内道路S F1890の存在をうかがわせる。奈良時代中頃から後半にかけての時期（B期）は、坪の南半の宅地内で和同開珎を鑄造した工房がある。後半の時期（C、D期）は、坪は全域すなわち1町分の宅地になる。奈良時代末期（C期）は、大型建物S B1819を中心に多くの建物が整然と配置され、かなり官位が高い貴族の邸宅であったことを思わせる。全時期とも、建物の桁行、梁行寸法が異なるものが多く、建物等の配置にあたって、方眼地割による計画性はみられない。また、瓦の出土量が少ないことからみて、発掘地区には瓦葺の建物はほとんどなかったようである。

なお、遺構検出面下約60cmには発掘区全域にわたって砂礫層が厚く堆積しており、その中に縄文土器片や多数の流木が存在した。

平城京造営以前の遺構としては、発掘区南端中央に弥生土器を含む斜行溝S D1807がある。しかし、平安時代初期以降の遺構は、遺構面が全般的にかなり削平されたためか顕著なものはみあたらない。発掘区西半にみられる中世の河川跡S D1915（PL.14）は、北方を流れる佐保川と関連したものである。これによって、この部分に存在した以前の遺構はすっかり破壊されている。

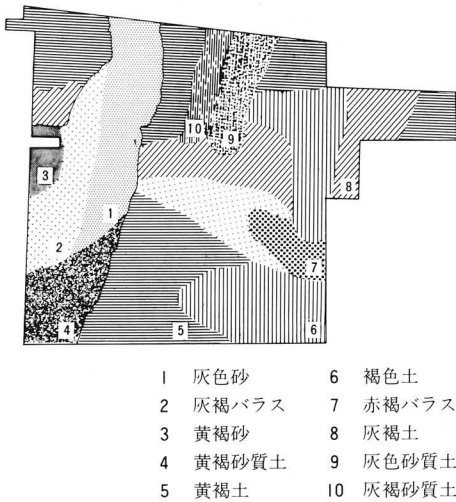


fig. 9 遺構検出面土層図

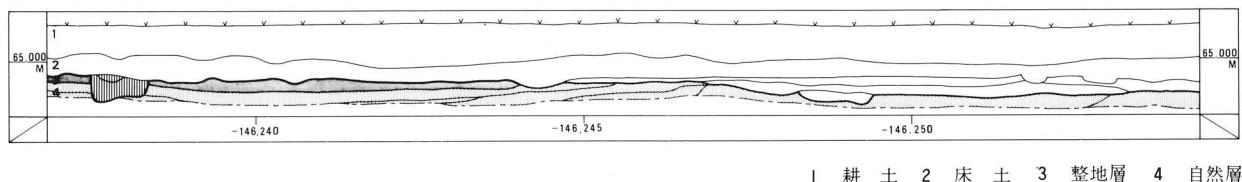


fig.10 発掘区東壁（南側）土層図

2. 遺構

検出した主要遺構は、建物25棟、堀7条、溝5条、井戸2基、土塀などである。和同開珎鑄造関係の土塀SX01～32は次節にまわして、その他については、遺構番号順に解説する。

SB1781(PL. 6)：発掘区東南隅に位置する掘立柱建物。東側の南北柱筋は西側の柱筋と比べて、柱掘形や柱痕跡がひとまわり大きく深いので、この建物は西面廂付の南北棟建物と考えられる。桁行は2間（7尺）以上、梁行は不明で廂の出は8尺である。柱掘形から奈良時代後半の軒丸瓦（6282B型式）が出土。

SD1783：発掘区東寄りにある南北溝。幅約90cmで、深さは削平のため約5cmと浅い。暗灰褐粘質土が堆積し、特に水の流れた跡はみあたらず、敷地を区画する溝と考えられる。奈良時代中頃から後半にかけての土器類が出土。重複関係からこの溝はSB1831より新しく、SB1789及びSB1822より古い。

SB1787(PL. 8)：桁行1間（10尺）以上、梁行2間（9尺等間）の掘立柱の南北棟建物。柱掘形は一辺約90cmの方形で、西北隅及び東・西の側柱筋の北から1間目の掘形に径約25cmの八角形の柱根が残存する。北妻柱筋は、西側にある東西堀SA1798と柱筋が揃うので同時期と思われる。

SB1789(PL. 8)：桁行5間（6尺等間）、梁行2間（6.5尺等間）の掘立柱の南北棟建物。柱掘形は小型で丸味を帯びており、西北隅には直径20cmほどの柱根が残る。北半の掘形は、赤褐色バラスを含む砂礫層に掘り込まれるため、柱痕跡は判然としない。

SA1790(PL. 9)：発掘区南に位置する掘立柱の東西柱列。左右合わせて延16間分検出した。柱間は7尺を基本とする。土塀SK1796の西側の柱掘形は一辺約80cmの方形で整然と並び、直径30cm内外の柱痕跡がよく残る。位置的には、坪の $\frac{1}{4}$ ライン付近にあるが、坪分割堀とすると東西に長い宅地割になるため、敷地を区画する堀と考えられる。

SB1791：発掘区東端にある南北3間（6尺等間）の掘立柱列。妻柱等は発掘区外にでるため検出しないが、梁行2間（6尺等間）の南北棟と考えると、北側にある建物SB1822と柱筋が揃う。

遺構には一連番号を付して、その前にSA：築地・柵・土塀、SB：建物、SC：廊、SD：溝、SK：土塀、SX：その他、などの分類番号を標記する。

遺構の実測は国土方眼座標にしたがい、高さの基準は標高である。

● 柱根 ○ 柱痕跡 ○ 柱抜取穴 ○ 柱穴 ○ 推定

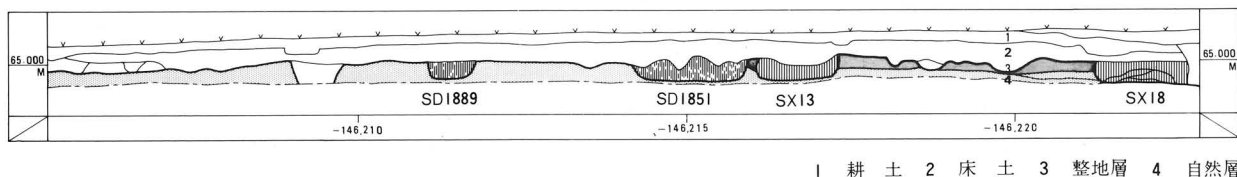
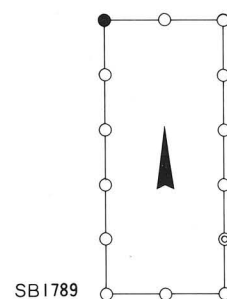
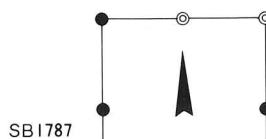
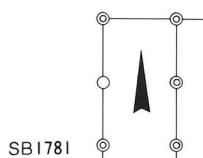


fig.11 発掘区東壁（北側）土層図

S A 1792：東南に隅がくる矩折れの柱列。東西7間分、南北3間分検出した。柱間寸法は8尺が基本である。東南隅の掘形に柱根が残る。S K 1796に関連した目隠堀と思われる。

S A 1793：S A 1792の南にある東西方向の掘立柱列。15間分(6.5尺等間)検出した。東側は南北溝S D 1793の西側で終る。一部の掘形に柱根が残る、他は直径約20cmの柱痕跡が明瞭に残る。東で北にやや振れるが、柱掘形の重複関係から、S B 1800、S E 1801、S B 1813より古く、敷地内を区画する堀と思われる。

S K 1796：直径約4mの円形の大土壇で深さ約90cm。東西堀S A 1790の柱穴を検出しないので、時期はこれより下る。奈良時代中頃から後半の土器類が出土する。井戸跡の可能性もある。

S A 1798：(PL. 9)：発掘区南寄りにある東西柱列。6間分(8尺等間)を検出。柱掘形は方形で整然と並ぶ。一部に柱根が残る。西側にある東西棟建物S B 1813の棟通り筋と揃う。

S A 1799：東西堀S A 1798の南にある東西方向の柱列。6間分検出。柱掘形及び柱間は一定でないが平均柱間寸法は7尺となる。柱筋は国土方眼に対し東で北に振れており、時期は下ると考えられる。

S B 1800：井戸S E 1801の井戸屋形。柱間寸法は東西11尺、南北10尺と異なる。東南隅柱には、堀S A 1798が取り付く。西南隅柱の掘形は、攪乱のため検出しない。この隅柱が堀の柱列とずれるのは、建設時期が異なるためであろう。

S E 1801(PL. 13)：発掘区南寄りにある大型の井戸。井戸掘形は、二段になっている。上段は東西3.9m、南北3.2m、深さ0.6mで、下段はこの東寄りに掘られ、一辺2.2m、深さ0.5mの正方形である。井戸枠は井籠組で、下部の4段が残存する。井戸枠内径は東西1.6m、南北1.63mある。板厚は約6cm、材種は檜である。この井戸から奈良時代末の土器類が出土し、廃絶の時期はこの頃と思われる。

S B 1812：桁行3間(7尺等間)、梁行1間(12尺)の掘立柱の東西棟建物。東妻柱はなく、西妻柱の掘形はやや小型で柱痕跡がない。側柱の掘形には、直径25cmほどの柱痕跡が明瞭に残る。柱掘形の切り合い関係から堀S A 1790より新しいことがわかる。

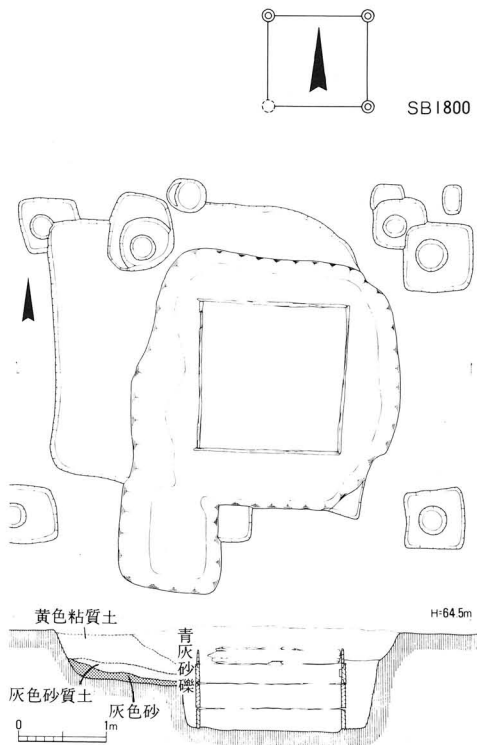
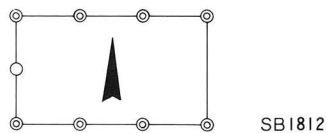


fig.12 S E 1801実測図



SB1812

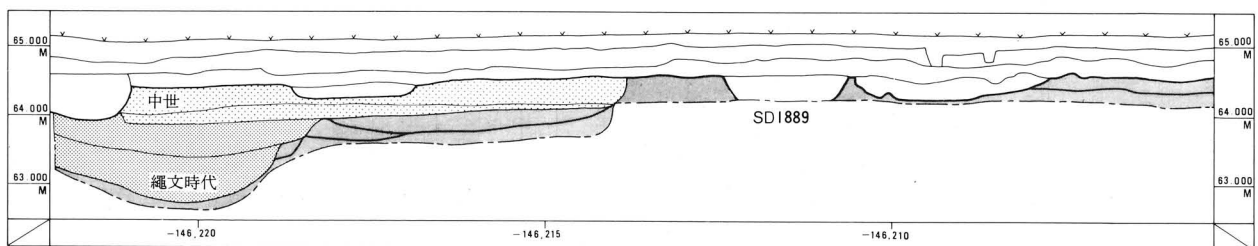


fig.13 発掘区西壁土層図

SB1813(PL. 7)：発掘区西南に位置する掘立柱の東西棟建物。桁行5間のうち中央間が10尺、脇間、端間は8尺等間で、梁行は2間(8尺等間)。柱掘形は方形で整然と並び、各々直径30cmほどの柱痕跡が明瞭に残る。桁行中央間のみ柱間寸法が10尺と広いのは、北側にある大型建物**SB1817**の桁行中央間に合わせたものと考えられる。東妻柱の柱痕跡下には礎盤にあてた木片が残存する。柱掘形の切り合い関係から東西塀**SA1783**より新しいことがわかる。

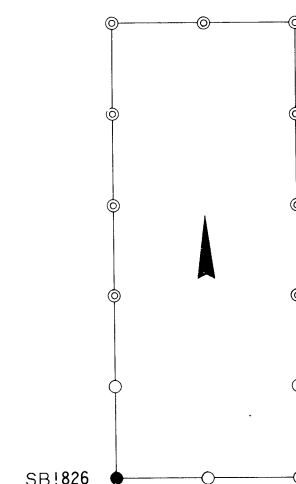
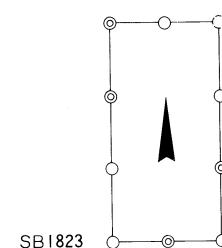
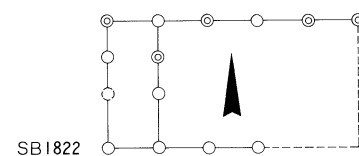
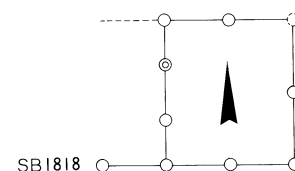
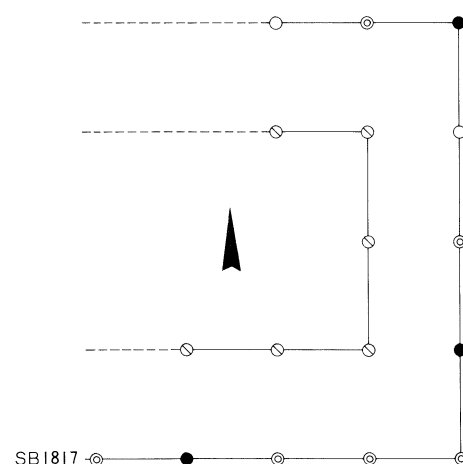
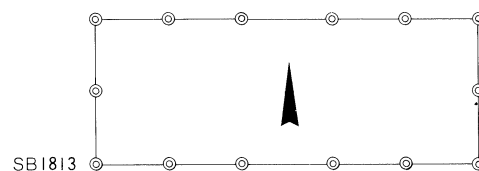
SB1817(PL. 7)：東西2間以上(10尺等間)、南北2間(12尺等間)の身舎の、東・南・北の三面に廂が取り付く掘立柱の建物。廂の出は東10尺、南・北12尺と振隅になる。西半部分の中世の河川跡**SD1915**に攪乱されているが、建物の規模や坪内の位置から考えて、桁行5間、梁間2間、四面廂付の東西棟建物と思われる。身舎柱の掘形には柱抜き取り穴があるが、隅柱及び妻柱を外側(東側)に抜き取るのに対し、他は内側に抜き取っている。側柱の柱掘形は、身舎のものとは比べるとやや小さく、直径30cmほどの柱根が残るものもある。柱掘形の深さは、遺構検出面から深いもので約60cmしかないもので、遺構面は後世大幅に削平されたことをうかがわせる。

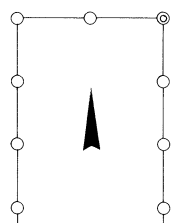
SB1818：桁行3間以上(7尺等間)、梁行2間(8尺等間)の掘立柱の東西棟建物。東から2間目の柱筋にある2つの柱穴は間仕切りと考えられる。西半は河川跡**SD1915**による攪乱をうけ失なわれている。東妻柱穴は、大型建物**SB1817**の柱掘形に切られるので、この建物のほうが時期は古い。

SB1822：桁行5間(5.5尺等間)、梁行3間(延べ14尺)の掘立柱の東西棟建物。西妻は後世の攪乱で失なわれ、東半は発掘区外に出るため詳細は不明である。西から2間目の南北方向の柱筋は、北2間の柱間は4尺等間、南1間は6尺と広い。

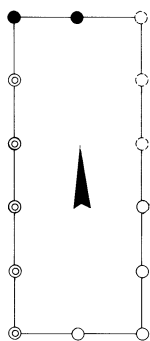
SB1823：桁行3間(8尺等間)、梁行2間(平均6尺)の掘立柱の南北棟建物。妻柱の位置がややずれる。柱掘形は全体的に小さい。建物**SB1826**とは、東側柱北から1間目が切り合うが、それほど明瞭でない。東北隅柱穴を検出できなかったことから、この建物のほうが時期は古いと考えられる。

SB1826(PL. 7)：発掘区中央東寄りにある桁行5間(10尺等間)、梁行2間(10尺等間)の掘立柱の南北棟建物。柱掘形は一辺約1mで比較的大きい。西南隅柱穴に柱根と礎盤が残り、南妻柱の掘形では、遺構検出面からわずかなセンチメートル下に礎盤が残る。南妻柱筋は西側の大型建物**SB1817**の北入側柱筋と揃う。全体の建物配置から考えて、これと同時期と思われる。なお、一部の柱掘形の埋土から奈良時代末期に属する土器類が出土した。

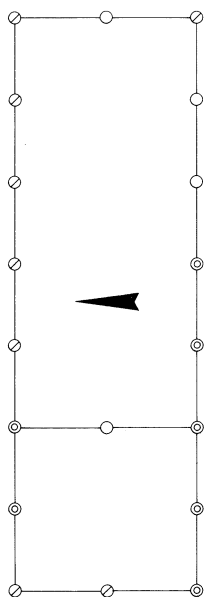




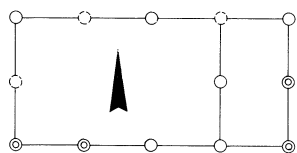
SB1829



SB1830



SB1831



SB1835

SB1829(PL. 8)：発掘区東端にある掘立柱の南北棟建物。桁行3間以上(7尺等間)、梁行2間(8尺等間)で南半は発掘区外へ出る。掘形は全体的に小さい。東北隅柱の掘形には柱痕跡が明瞭に残っていた。その他は南北に長い柱抜き取り穴があり、この埋土にうつば断片、銅滓、焼土等が混じるものがある。したがって建設時期は、和同開珎製造期(B期)より以降には下らない。

SB1830(PL. 8)：桁行5間(7尺等間)、梁行2間(7尺等間)の掘立柱の南北棟建物。西側柱筋の柱掘形は一辺約60cmの方形で、柱痕跡が明瞭に残る。東側柱筋は発掘区外となるが、発掘区東壁断面土層から南二間分の柱穴が検出された。西北隅及び北妻の柱掘形には、焼土が混じり直径約20cmの柱根が残存する。この建物の建設時期はB期を下るものと考えられる。

SB1831(PL. 5)：桁行7間(9尺等間)、梁行2間(10尺等間)の掘立柱の東西棟建物。西から2間目の建物内部の柱掘形は間仕切柱のものと思われる。柱掘形は一辺1.5mを越えており、この発掘区内では大きい方に属する。柱抜き取り穴があるものが多く、いずれも建物の外側を向いている。北側柱東から1、2間目の柱抜き穴は、焼土で埋まり、和同開珎製造に関係したと思われる工具類の断片や銭範も混じっている。特に東から1間目では柱掘形内部にも焼土ピットは掘られており、重複する他の建物との柱穴の切り合いから考えても、この建物は最も古い時期のものと思われる。

SB1835：発掘区中央にある桁行4間(7.5尺等間)、梁行2間(7尺等間)の掘立柱の東西棟建物。東から1間目に間仕切がある。柱穴は全体的に小さく、東寄りには人頭大から拳大の足固め石が残るものが多い。SB1831とは東妻柱の柱穴の切り合いから、この建物の方が新しいことがわかる。

SB1836：発掘区東端に位置する掘立柱の東西棟建物。北側柱の4間(8尺等間)のみ柱掘形は明瞭で、3ヶ所に柱根が残る。東妻柱穴は、東北隅柱から9～10尺南の位置にわずかにかかる。西端部は中世の攪乱で失われ、南側柱筋は発掘区外となるため規模は不明であるが、桁行は6間以上にならない。北側柱筋は西方のSB1826の北妻柱筋と揃うので、これと同時期のものと考えられる。

SA1838：8尺等間の東西柱列。4間分検出した(調査終了後の立会調査で東へ延びることを確認)。柱筋は、南北棟SB1830の北妻柱筋と揃うので、これと同時期の堀と考えられる。

SX1842：発掘区東北で検出された小石留りの小穴群。直径60cmほどの石留りが散在するが、穴の掘形の輪郭は明瞭でない。遺構の性格はいまのところ不明である。

S K 1847：直径約80cm、深さ約20cmの土壇。平安時代前期に属する土器類及び奈良時代後半の軒丸瓦（6282D型式）が出土。

S K 1848：直径約1 m、深さ約30cmの土壇。平安時代前期に属する土器類が出土。

S K 1849：発掘区東側で検出された浅い土壇状の窪みで、製塩土器がまとまって出土。

S D 1851(PL.10)：坪を南北に二分する位置に掘られた東西溝。東側は遺存状態がよく、発掘区東端でも確認する。溝幅は1～2 mとばらつき、深さは20cm内外と浅い。溝の埋土は茶褐色砂質土で、焼土もわずかに混る。奈良時代中頃から後半の土器類が出土。平城京造営当初から奈良時代後半まで存続すると考えられる。

S D 1889(PL.10)：S D 1851の北にある東西溝。遺存状態は良くなく、溝幅も0.5～1.5 mと一定せず、深さは20cm内外である。奈良時代中頃から後半の土器類が出土。

S F 1890(PL.10)：S D 1851、S D 1889の間にある。両溝が存続する時期は、ここに他の遺構はみあたらないので、坪内を通る小路で両溝はその側溝と推定される。道幅は溝心々で平均3.6 mである。

S B 1891(PL. 8)：発掘区東北にある掘立柱の東西棟建物。桁行6間以上(8尺等間)、梁行2間(8.5尺等間)。東端は発掘区外へでる。西から3間目に間仕切が付く。柱掘形は柱抜き取り穴と重なり南北に長いものが多い。南側柱筋の柱掘形は東西溝S D 1889の埋土に掘込まれるため、建設時期は溝廃絶後と考えられる。

S D 1892：発掘区東北にある南北溝。幅1.5 m、深さ20cmほどで、南端は中世の攪乱で明らかでないが、東西溝S D 1889に続くと考えられる。この溝は坪の北半を東西に二分する位置にあたる可能性もあるので、検討を要する。廃絶の時期は出土遺物から奈良時代後半頃と推定される。

S B 1893：桁行4間(6尺等間)、梁行1間以上(6尺)の掘立柱の東西棟建物。北側柱筋は発掘区外にでる。西妻柱筋の柱穴は南北溝S D 1892の埋土に掘込まれるため、これより時期は新しい。

S A 1896：S B 1893の西側にある南北の柱列。2間分(8尺等間)検出した。2ヶ所にやせた柱根が残存する。時期は不明。

S E 1898(PL.13)：発掘区北側中央にある井戸。井戸の掘形は、東西3.3 m、南北2 mの矩形をしており、井戸枠のある西半部分のみ更に掘り込んでいる。深さは西側で約90cmと浅い。井戸枠は、縦板組で内径で東西1.35 m、南北1.2 mあり内側に枠木をあて支持する。枠板は下部の約30 cmが残存する。掘形、井戸枠ともに、西でやや北に振れる。井戸埋土から奈良時代末期の土器類が出土。

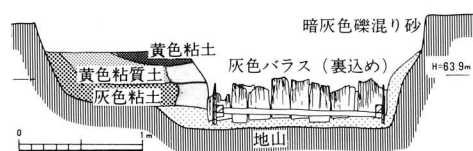
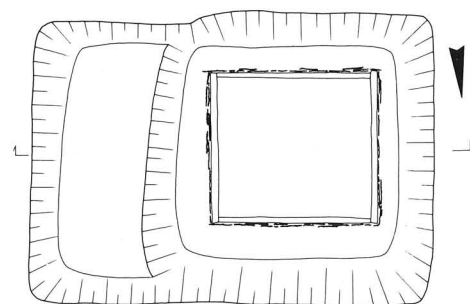
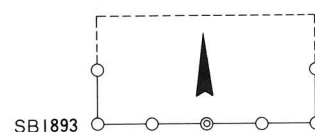
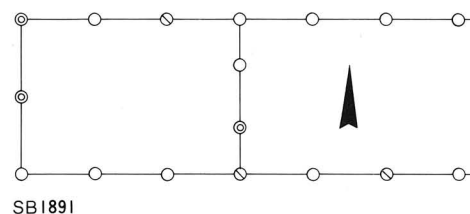
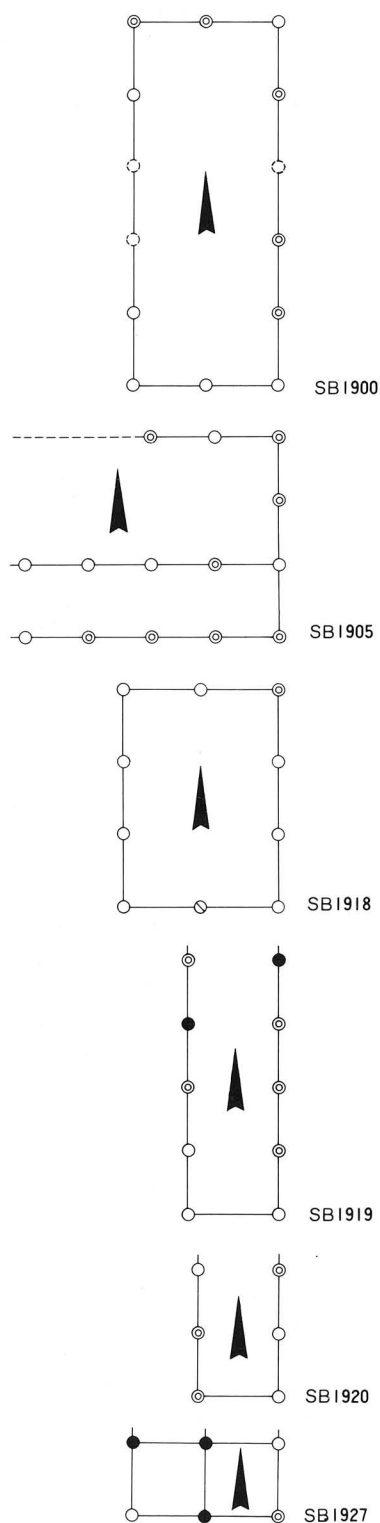


fig.14 S E 1898実測図



SB1900(PL. 5)：発掘区中央にある桁行5間(8尺等間)、梁行2間(8尺等間)の掘立柱の南北棟建物。柱掘形は小さく円形に近いものが多い。柱穴の切り合いからSB1817より古く、北妻柱筋がSB1831の南側柱筋とほぼ揃うのでこれと同時期と考えられる。

SB1905(PL. 6)：桁行4間以上(7尺等間)、梁行2間(7尺等間)南廂付(8尺)の掘立柱の東西棟建物。西端は攪乱で失なわれる。SB1835と重複するが新旧は不明である。全体の配置からこの建物のほうを古く考えたい。

SD1912：発掘区北にある南北溝。幅約1.5m、深さ約20cmで南端は東西溝SD1891に続く。奈良時代中頃から後半にかけての土器類が出土しており、廃絶はこの頃と考えられる。

SA1913：井戸SE1898の北にある東西に並ぶ柱列。4間分検出したが、柱間は一定でなく、柱筋も東でやや北に振れる。時期不明。

SB1918(PL. 5)：発掘区西北にある桁行3間(8尺等間)、梁行2間(8.5尺等間)の掘立柱の南北棟建物。東北隅柱の掘形に直径15cmの柱痕跡が明瞭に残る。南妻柱の掘形は小さいながら、西向きの柱抜き取り穴がある。

SB1919(PL. 5)：桁行4間以上(7尺等間)、梁行1間(10尺)の掘立柱の南北棟建物。柱掘形は一辺約60cmで小さいが、整然とならぶ。一部に柱根及び柱痕跡が残る。南端の柱穴は東西溝SD1889の埋土の上に掘込まれるので、この溝の廃絶後に建てられたことがわかる。

SB1920(PL. 5)：SB1919の北側にある桁行2間以上(7尺等間)、梁行1間(9尺)の掘立柱の南北棟建物。北半は発掘区外へでる。SB1919とは重なり合うが、柱穴の切り合いからこの建物のほうが新しいことがわかる。

SB1927：東西2間(8尺等間)、南北1間以上(8尺)の掘立柱の建物。北半は発掘区外であり、今回は確認しなかったが、規模から考えて総柱の倉庫になる可能性がある。3ヶ所の柱穴にやせた柱根が残る。建物の方向は、東でやや南に振れる。柱穴の検出層位から考えて、古い時期の建物であると思われる。

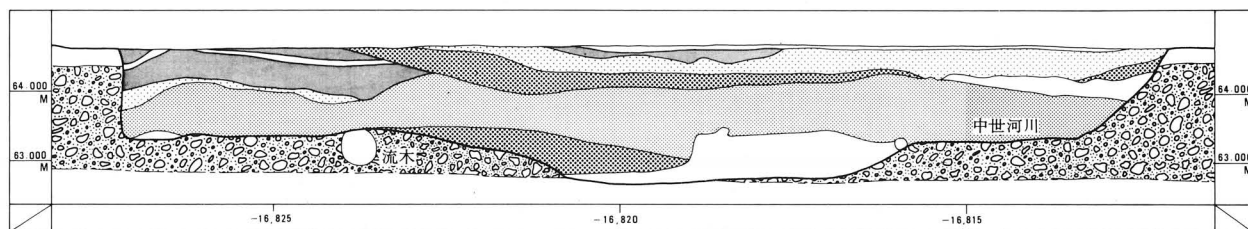


fig.15 中世河川 SD1915 土層図

3. 焼土ピット (PL 11・12)

調査区の東北部分で焼土のつまったピット群を検出した。このピット群の拡がり、当初に設定した調査区域の外に延びることが予想されたため、2度にわたって調査区の拡張を行なった。その結果 fig.17に示すように東西20m、南北15mの範囲に密集した焼土ピットを、総数で31基検出した。しかし、この範囲には現代と中世の大規模な攪乱による破壊がみられるので、焼土ピットの実数はさらに多かったものとみられる。焼土ピットの拡がり、A・B期のS D1851を北限とし、南はB₁期の南北棟建物S B1829の柱抜取穴にも焼土の投棄が観察できた。焼土ピットは、検出順に通し番号を付して遺構と遺物を登録したが、そのうちS X05、06は土壌の形をなさず、整地面に投棄されたものである。

これらのピットの平面形は、大きいもので190×90cm、小さいもので35×53cmを測るが、いずれも隅丸方形の掘形を呈する。焼土ピットのなかには、たがいに切り合うものがあり、すべてのピットが同時に掘り込まれたものではない。また局地的に残っていた整地土を境にして、上下両面で遺構を検出しているので、こうしたピット群の形成は決して単期間によるものではない。S X08B、16、25、26、28は切り合いと検出層位から古くさかのぼることが確実なピットで、遺構変遷B₁期に対応するものであろう。またS X13、14、15、18、21、22は整地土の上面から掘られており、B₂期にあてられる。S X01、08A、23もB₂期に対応するとみられる。しかし、これらのピット内の埋土から出土した土師器、須恵器のうち年代の判明するものは、すべて平城宮の土器編年で第Ⅲ期(天平末年頃)に相当する。またS X16を除いて、掘形の平面形の長・短軸は、平城京の地割の方向とおおむね一致している。

ピット内の埋土の状況は、橙赤色の焼土だけからなるものもあるが、炭、赤褐色砂質土、灰褐色砂質土、灰褐色粘質土が明瞭に層界をなして推積するものが多い(fig.16)。一辺が100cmを超える大型の土壌(S X13、15、18など)のなかには、灰褐色砂質土、灰褐色粘質土が水平に堆積し、粘質土中にはおそらく燃料とみられる生焼けの木片が炭片とともに多量に混っていた。一方、一辺が100cm以下の小型のピットでは、燃料残片を含む粘質土はみあたらず、ピットの性格に相違のあったことをうかがわせる。しかし、いずれのピットの壁面と基底部分にも加熱された痕跡はみうけられなかった。

ピット内の埋土からは、土師器、須恵器のほか、るつば、ふいごの羽口、銭范、銅滓などが出土した。とりわけ橙赤色の焼土層からは、大小の銭范の断片が多量に出土している。銭范は、和同開珎の一種に限られる。S X13からは、和同銭がるつばに付着した状態で出土した。またS X14、17からは鑄放しの状態のままの和同銭を検出した。S X15から、10cm大の赤く焼けた刎入りの粘土ブロックが数個出土したが、土壌の壁に付着した状態ではなく、遊離した状態で採集された。これらは本来、炉壁の一部をなしていたとみられる。

以上の焼土ピット群は、鑄造炉の本体の基礎地業とは断定できないにせよ、和同開珎を鑄造する鑄銭工房に附属するピット群であることは間違いなく、しかも鑄銭の工程で生じた廃棄物によって埋め立てられたものである。これらのピット群がS D1851以北には拡がらないところからみて、鑄銭工房は七坪を折半した南半部を占めていたことがうかがえる。また、この鑄銭跡の年代も出土土器から推定して奈良時代中頃から後半にかけての時期に求めることができる。

広島大学教授潮見浩氏から、焼土ピットに関して、貴重な助言を頂戴した。付記して謝辞としたい。

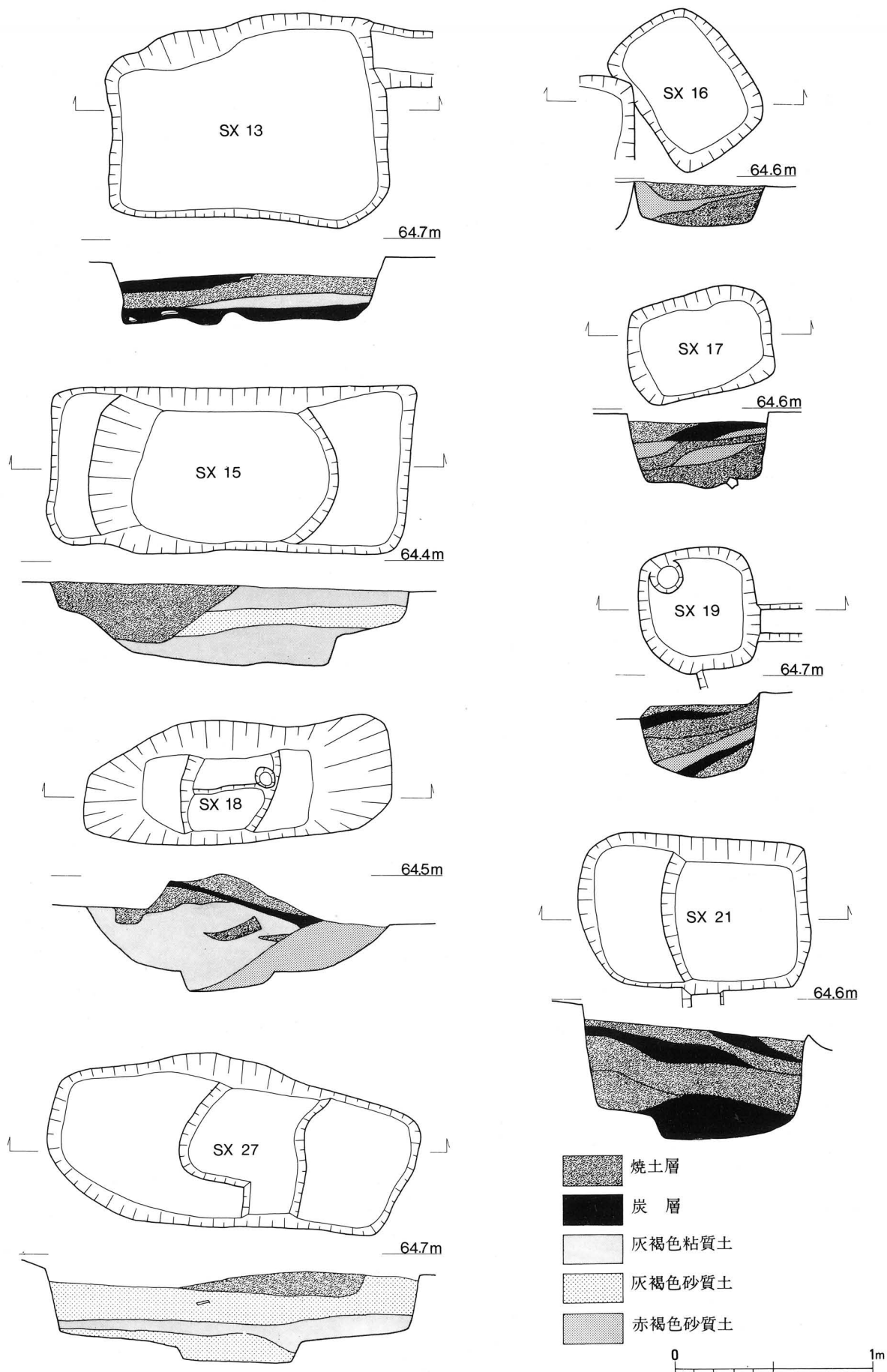


fig.16 焼土ピット実測図

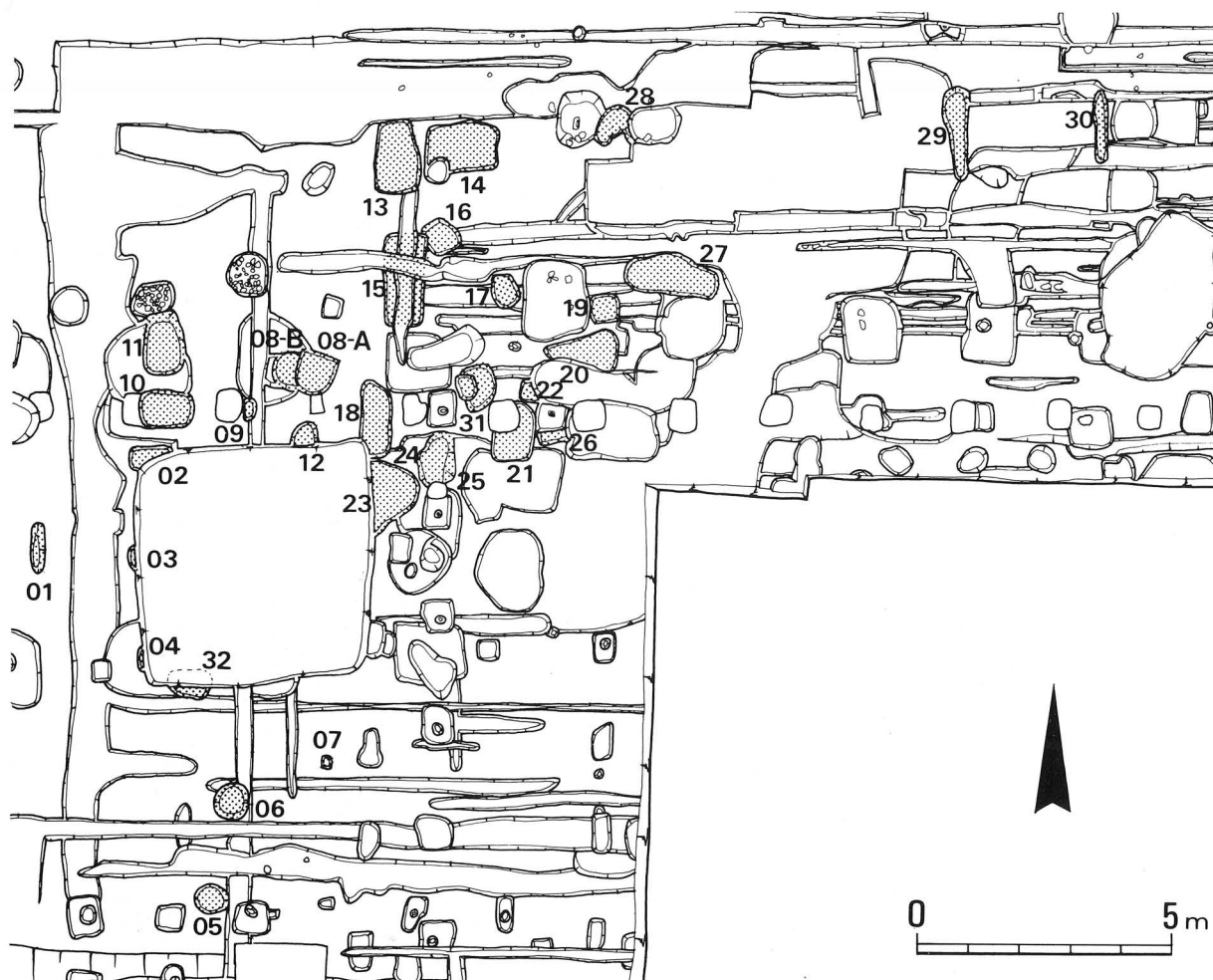


fig.17 焼土ピット分布図

焼土ピットの遺構番号	寸法 (cm) 東西×南北×深さ	鑄造関係の遺物	土器の時期	焼土ピットの遺構番号	寸法 (cm) 東西×南北×深さ	鑄造関係の遺物	土器の時期
SX01	30×100×10	銅滓	III	SX17	54×75×30	和同銭・銭範・銅板片	
SX02	(90×50×30)	銭範・るつば・銅滓	III	SX18	60×155×60	銭範・るつば・銅滓 ふいごの羽口	III
SX03	(15×55×20)			SX19	60×60×40	銭範・るつば	
SX04	(17×37×10)		III	SX20	(170×80×40)	銭範・銅棒・ふいごの羽口	III
SX05	直径73×10			SX21	80×115×70	和同銭・銭範・るつば ふいごの羽口	III
SX06	直径68×40	銭範・銅片・るつば・銅滓		SX22	40×45×10	るつば・ふいごの羽口	
SX07	52×45×10	銅滓		SX23	100×150×30	和同銭・銭範・るつば・銅滓 ふいごの羽口	III
SX08A	80×70×20	銭範・るつば・ふいごの羽口	III	SX24	(45×?×20)		
SX08B	75×70×20	銭範・ふいごの羽口	III	SX25	(45×60×10)	和同銭・銭範・るつば ふいごの羽口	
SX09	35×53×10			SX26	30×75×10	ふいごの羽口	
SX10	110×80×20		III	SX27	190×90×50	銭範・るつば・ふいごの羽口	III
SX11	85×110×40		III	SX28	(60×80×30)	ふいごの羽口	
SX12	(55×56×20)	ふいごの羽口		SX29	165×35×40	銭範・銅滓・ふいごの羽口	
SX13	105×143×30	和同銭・銭範・るつば・銅滓 ふいごの羽口	III	SX30	30×150×30	銭範・るつば・銅滓 ふいごの羽口	
SX14	135×104×50	和同銭・銭範・るつば・銅滓 ふいごの羽口	III	SX31	60×85×20	和同銭・銭範・ふいごの羽口	III
SX15	84×18×40	銭範・るつば・銅滓 ふいごの羽口	III	SX32	(85×35×40)	和同銭・銭範	III
SX16	58×76×20		III	カッコは復元による参考値。			

tab. 3 焼土ピット一覧表

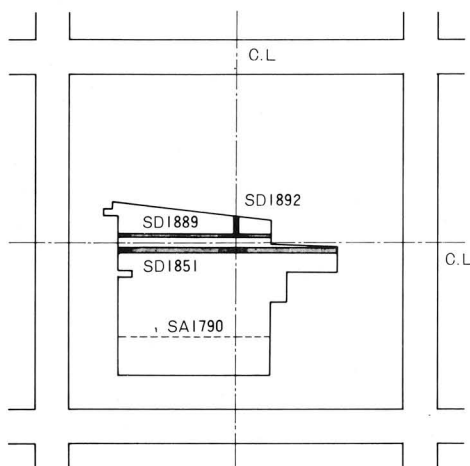


fig.18 七坪の占地

地点名	X	Y	備考
東一坊大路心	-145757.263	-18054.064	39次調査実測値
二条条間大路心	-145751.977	-18027.326	"
二坊坊間小路心	-146192.580	-17653.825	86次調査実測値
朱雀門心	-145994.500	-18586.320	16次調査実測値

tab. 4 計測座標表

4. 占地と時期区分

1. 占地

左京三条四坊七坪を囲む条坊路の正確な位置・幅員等は、今のところ明らかでない。今回の調査区は坪内であるため、検出した奈良時代の遺構が坪内に占める位置は正確にはわからない。表 tab. 4は、これまでの発掘成果で明らかとなった条坊の交点の座標である。また国土方眼座標に対し、朱雀大路はN15°41' W、二条大路はE4°N～E11°N振れていることが確認されている。これらをもとに京の条坊計画（1800尺の方眼地割）に基づいて1尺＝0.295mとして計算すると、七坪を囲む条坊路の幅員を全て同じとした場合に、坪の中心線は東西方向が4'の振れで東西溝SD1851、11'の振れで東西溝SD1889を通る。また南北方向は、南北溝SD1889を通る。この2条の東西溝間は坪内の小路SF1890と考えられるので、この小路が坪を南北に分割する施設であると推定できる。したがって、これらの遺構が存在する奈良時代後半までは、南が $\frac{1}{2}$ 坪、北は更に $\frac{1}{2}$ 坪を少なくとも東西に二分する利用であったと考えられる。

2. 時期区分

今回の調査で検出した遺構は多岐にわたっており、他の調査済の京内遺跡と比べても決して少なくない。そのうちで出土遺物から建設時期が限定される遺構は全体の2割ほどである。したがって、時期区分は、これを基本に建物の重複関係、配置状況等によって決定した。その結果、奈良時代初頭から平安時代初期にかけて、大きく4時期に区分することができる。

A期(奈良時代初頭)：建物3棟、堀1条、溝4条、道路1筋が主な遺構である。七坪は、坪内の小路SF1890によって南北に分割される。南 $\frac{1}{2}$ 坪は建物2棟、堀1条で構成される。東西棟建物SB1831を中心に、柱筋をほぼ揃えて南北棟SB1900が西側に配され、南方には、敷地を区画する堀SA1790が設けられる。東西棟建物SB1831の位置は、間仕切柱筋が坪の南北中心線にのり、北側柱筋は東西溝SD1851の溝心から南へ20尺である。東西堀SA1790は、坪の東西中心線から南へ120尺にある。しかし、敷地内の建物等の配置や柱間寸法に特に計画性はみられない。北 $\frac{1}{2}$ 坪の構成については明らかでない。南北溝SD1892を宅地割の溝とすれば北半は更に二分されることになる。発掘区西北に南北棟建物SB1918が建つ。

B期(奈良時代中頃～後半)：坪割は、A期を踏襲している。この時期の建物は柱間寸法が7～8尺と比較的小さいのが特徴である。南 $\frac{1}{2}$ 坪では一部に建てかえや新設があったと考えられるので、前半をB₁、後半をB₂と区分する。

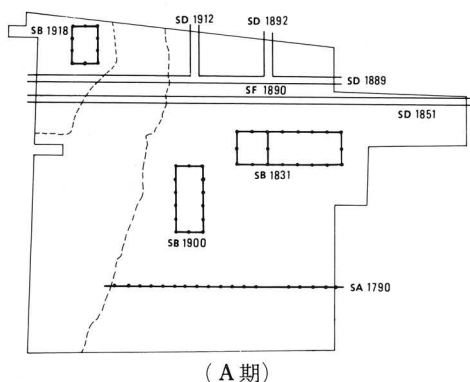


fig.19 七坪変遷図(I)

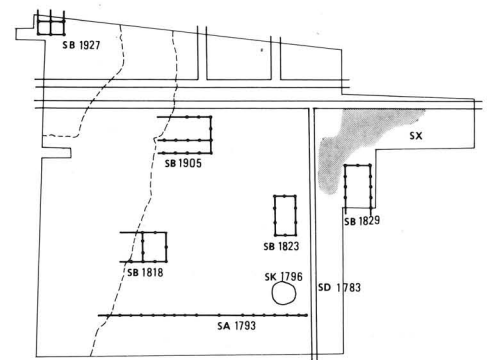
まず、 B_1 期に南 $\frac{1}{2}$ 坪は南廂付東西棟建物 S B1905を中心に建物 4 棟、堀 1 条、土塼 1、溝 1 条それに和同開珎鑄造関係遺構からなる。東西堀 S A1793と南北溝 S D1783で囲まれる一郭は、中心区画をなすと思われる。この区画の東南隅には井戸跡と推定される大型土塼 S K1796がある。東西堀 S A1793は、坪分割溝 S D1851から 130 尺南にある。南北棟 S B1823の西側柱筋は、坪の南北中心線上にあるが全般的な配置関係に計画性はみられない。東側の区画は、和同開珎の鑄造に関係したと思われる土塼群が東西約 20 m、南北約 15 m の範囲に分布する。この土塼の埋土には、炭化物、灰、焼土等が層状に堆積しているものもある。しかし、土塼周辺の地山層が焼けていないため、これが直ちに炉であるとは断定できない。この区画に建つ南北棟 S B1829は、北でやや東に振れており、柱穴も大きくないが、工房に関係する雑舎であると考えられる。

B_2 期になると、南北溝 S D1783、東西堀 S A1793を廃絶して、鍵型の堀 S A1792が目隠堀として新たに設置される。また南北棟建物 S B1829に替わって東西棟建物 S B1822が建つ。その南に南北棟建物 S B1791及び西廂付南北棟 S B1781が建つ。鑄銭関係遺構の土塼群はこの時期も存在する。

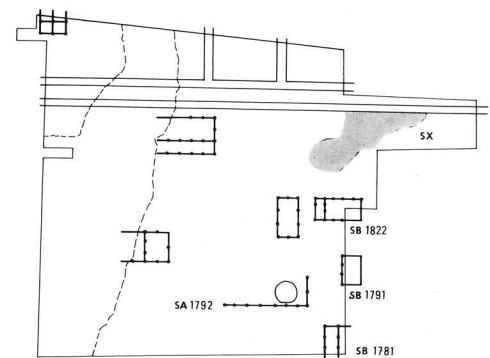
北 $\frac{1}{2}$ 坪の坪割は、A 期と変わらず発掘区西北では S B1918に変わり倉庫と思われる建物 S B1927が建つ。

C 期(奈良時代末期)：この時期には、坪割の小路及び側溝は廃絶し、七坪は全域すなわち 1 町分の利用に変わる。遺構には、建物 8 棟、井戸 2 基、堀 1 条がある。この時期の建物は全般的に規模が大きく、整然と配置するのが特徴である。坪の西南にある四面廂付の東西棟建物 S B1817を中心に、南側に中央間の柱間をこれと揃えた東西棟建物 S B1813(棟心間で 60 尺)が、また東側に南妻柱筋を S B1817の北入側柱筋に揃えた南北棟建物 S B1826が建つ。S B1813の東方には、東西堀 S A1798及び南北棟建物 S B1787が柱筋を揃えて建ち並ぶ。これら中心部分を構成する建物の配置は計画的である。これに対して、北側に建つ東西棟建物 S B1891及び南北棟建物 S B1919は、中心部分の配置計画とは直接関係していない雑舎である。長岡京へ遷都とともにこれらの建物は取り壊され、井戸 2 基 S E1801及び S E1898も廃絶されたようである。

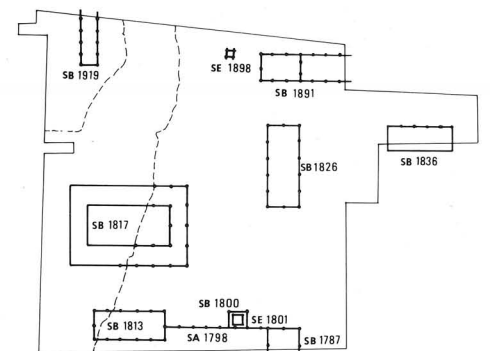
D 期(平安時代初期)：平城上皇による平城京遷都計画に対応する時期と考えられる。七坪は 1 町分の利用がなされたようで、建物 6 棟、堀 2 条から構成される。しかし、坪の中心付近に建つ東西棟建物 S B1835をはじめ各建物の規模は、全般的に小さい。また、それらの配置も計画性にやや乏しいものとなっている。



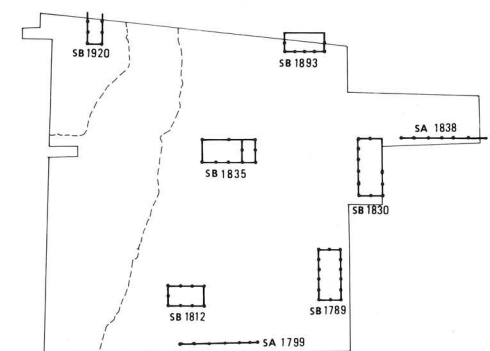
B_1 期



B_2 期



C 期



D 期

fig.20 七坪変遷図(II)